

卒業生インタビュー

不動産会社 勤務

外谷 紗恵（文学部歴史学科 2014 年度卒業生）

人事に関する仕事に興味があります

私は不動産会社の総務課に所属して、人事部門では入社する人や退社する人への対応など、総務部門では社員や社長のサポートなど、会社の円滑な運営を支援する業務を担当しています。

もともと人事関係の仕事に興味があり、以前は人材派遣会社で働いていましたが、そこでは経験できない新しい人事の仕事をしてみたいと思い、現在の会社に移りました。出身地の倉敷市にあるというのも、いまの職場を選んだ理由です。

大学では、まず和太鼓部に入りました

父の実家が大阪にある関係で、家族で京都に行くことが多く、神社仏閣も好きなので、京都に住んでみたいという思いが小さな頃からありました。

大学に入ると、せっかく京都に来たのだから京都らしいことをしてみたいと思って、大学の和太鼓部に入りました。京都といえば和風、和風といえば和太鼓というふうに連想したのと、新入生キャンプにオリターとして付いてくれた先輩が和太鼓部の人で、見学を勧められたことがきっかけになって、そのまま入部しました。

和太鼓部は、いろいろなところへ出かけて演奏します。たとえば清水焼焼団地の陶器まつり、大学の近くにある老人ホーム、神社の秋祭やお火焚祭、小学校の夏まつりなどですね。こちらから「演奏させてください」とお願いすることは少なく、演奏に出向いた先から紹介されて、新しいところへも演奏しに行くことがありました。

部長になって学んだのは、なぜコミュニケーションが大切なのかということ

2 回生の 1 年間は、和太鼓部の部長を務めました。それまでは教わる立場でしたが、今度は教える立場になったので、先輩から教わったことを伝えるだけでなく、自分なりに体得した経験も教えるようにしました。

特に次期部長になることが決まった後輩には、自分で試して成功した事例などを伝えようと努めたのですが、自分の言いたいニュアンスがなかなか伝わらないので、話すだけではわかりにくいと判断して、メールの文章を引用したり、実物を見せたりしながら、「こうしたら良かったよ」と言葉を添えることを意識していました。

後輩の育成について考えたり、部内のもめ事で悩んだりしたとき、一人で抱えきれなくて周りに相談し、アドバイスをもらうなどして、少し落ち着いて考えられるようになり、自分なりに解

決方法を導きだせました。その経験を通じて、人は一人では生きていけないからコミュニケーションがすごく大事なのだと学んだことは、わたしにとってすごく大きな財産になっています。

新入生のオリター経験から学んだこと

新入生のオリターを経験したのも、2回生のときです。1人のオリターが担当する新入生は10人程度なので、和太鼓の部員よりは少数ですが、集団をまとめることの難しさは身に沁みて感じましたね。入学して1週間も経たなくて緊張している新入生に、どう話しかけたらリラックスしてくれるのだろう、みんなが仲良くなってくれるのだろうということを常に意識しながら、オリターを務めました。

この経験があったので、和太鼓部で地域の方々と連絡や調整をするときにも、柔軟に対応することや相手の懐に入り込むような雰囲気づくりが少しは実践できたかなと思います。

京都には、学生が運営する観光案内所がありました

和太鼓部と並んで、大学生活で強く印象に残っているのは、観光案内所のボランティア活動（脚注※）です。1回生のときに、神社仏閣が好きだという話を和太鼓部の先輩にしたら、「わたしはこんなのに入っているよ」と教えられて、興味が湧き、見学をした後にボランティアメンバーに加わりました。「京都が好きだし、京都の魅力的なところをみんなで観光したり、楽しくやりたいな」と思ったのです。

そこでは観光案内だけでなく、みんなで観光プランを考えて、団体客のみなさんと一緒に歩いたり、小説の舞台になった場所を巡るツアーとか、神社仏閣を回るツアーとか、いろいろなテーマを設定してボランティアメンバーで観光するなどしていて、わたしは最初はそこに参加するというかたちで関わっていました。

カフェマップのような小さな冊子づくりの取り組みもあって、わたしも制作メンバーに加わりました。和太鼓部の部長をしていたときは、あまり関わることができなかつたけれど、3人1組でカフェや神社を取材して、その場所についての印象や感想を書いた記憶があります。

ただ、和太鼓部が忙しくて、定例の会議も欠席することが多かつたし、観光案内所のブースに入るのもなかなか難しかったので、たまに会議に出ても、どういう空気感でいけばいいのかかわからず、何もできていない自分がここにいていいのかという気持ちもありました。

※学生が運営する観光案内所「COCON KARASUMA 観光案内所（愛称：ここから京都）」

京都観光について学ぶ学生団体「関西観光学会」が、公益財団法人「稲盛財団」の出資を受け、2011年7月、京都市内の商業施設「COCON 烏丸」に開設した観光案内所。学生ボランティアが、ブースでの観光案内と併せて、ツイッターでの情報発信もおこなった。

観光案内所の学生代表を務めました

3回生になると、和太鼓部の部長を後輩にバトンタッチしたので、観光案内所の活動に落ち着いて取り組めるようになりました。

ちょうどその頃、COCON 烏丸にあった観光案内所は閉鎖され、四条河原町に新しくできた観光案内所で活動することになりました。「京都まちづくり交通研究所」という合同会社が、四条河原町に「京都まちなか交通・観光案内所」（以下、「まちなか観光案内所」）という施設をつくっておられて、COCON 烏丸を撤退した後の方向性を探っていた関西観光学会に「うちでやりませんか」と声をかけてくださったのだそうです。

四条河原町の「まちなか観光案内所」は、それ以前から大人の方々が運営されていたので、話し合いを重ねて、その人たちと連携しながら学生ボランティアで運営していこうということになり、わたしが代表を務めることになりました。

COCON 烏丸の「ここから京都」では、学生ボランティアがブースに入るのが大前提だったにもかかわらず、実態としては学生が1人も入らず、大人の職員の方だけがいるという状態が少なからずあったので、「まちなか観光案内所」では絶対にシフトに穴を開けないためにシフト調整を入れ、ボランティアメンバーにも「いつも学生がブースにいるようにしよう。それを大事にしよう」と声をかけ、注意を促しました。そこを徹底しないと、この活動はすぐに消滅してしまうと思ったのです。

代表になって、シフト調整などで一人ひとりのメンバーと話す機会が増えたことによって、相手と自分の考え方の違いに気づくことも増え、その違いを認め合いながら全体をまとめていくことの大切さを痛感しました。

他大学の人たちと共に活動する観光案内所

「まちなか観光案内所」では、外国人観光客が多いので、たいてい英語が堪能な高齢のボランティアの方と一緒にブースに入りました。その方々に英語を教わりながら一緒に観光案内をするのは楽しかったし、長く京都に住んでいる人たちなので知識が豊富で、「あの祭はこの角度で観るといいよ」とか「桜はここが穴場だよ」といった観光関連のことだけでなく、京野菜の調理法も教わりました。幅広い年代の方としっかりコミュニケーションができたことは、とても楽しい思い出です。

もちろん、道に迷っている観光客の方々に正確な行き方を伝えたり、たくさんある名所旧跡のうちどこに行こうかと悩んでいる方に自分なりのお薦めの場所を紹介したりして、「ありがとう」とか「参考になりました。ぜひ行ってみます」と感謝の言葉が返ってくると、すごくやりがいを感じました。

そうすると、もっと上手に観光案内ができるようにと、京都情報を深掘りしたガイドブックを読んだり、休日や授業の空き時間はカフェ巡りをして、新しいお店を開拓したりしました。

それに、観光案内所のボランティアは他の大学の人たちと一緒に活動するので、業務以外でも連絡を取り合って、一緒に遊んだり、会議の後に飲み会をすることがけっこうありました。それによって各メンバーの性格などをより深く知ることができたのは、代表としてすごく助かることでした。

「ここから京都」で冊子づくりにあまり参加できなかった者として、「まちなか観光案内所」ではそこにもう少し力を入れたかったという後悔がありますが、観光案内所を運営できたことはすごくよかったなと思っています。

多忙を極めたけれど、充実した大学生活でした

観光案内所の活動母体の「関西観光学会」は、各大学ごとに支部をつくっていました。橘支部は、学内では非公式のサークルだったので、部室がなく、教室も借りることができませんでした。公認サークルにしてもらえたら、部室が与えられ、もっとスムーズに集まることができ、より深い話し合いができたかなと思います。

また、単に京都が好きで学生だけが集まっていて、専門知識もないまま、先輩たちから教えてもらいつつ活動していたことを考えると、観光学や歴史学などの専門性を持った方のサポートを受けたほうがよかったかなと思います。

それから、お金や鍵の紛失など、何かトラブルが起きたときに自分が責任を問われたらどうしようという不安もあったので、トラブル対応について学べる機会もほしかったですね。課外活動なら先生や職員の方が付いてくださいますが、非公式サークルで地域活動をする場合も、気軽に相談できる窓口があれば、わたしたちはもっと安心して活動できただろうと思います。

コミュニケーション能力に関しては、和太鼓部でも、観光案内所でも、すごく鍛えられたので、いまの職場で就活生と対応するときも、ちょっとした会話で相手の緊張をほぐすなどして、和やかに進めることができます。地域活動をしていてよかったと感じる瞬間ですね。

わたしは大学生活の4年間を通して、ずっと居酒屋さんでアルバイトをしていましたし、和太鼓部や観光案内所の活動もあったし、ゼミや卒論にも取り組まないといけなかったもので、すごく忙しかったけれど、そのおかげで一生付き合える友人もできました。けっこう充実した大学生活だったなと思います。

